

# 教師の腕前診断

今回のテーマ

## しっかりと不登校をさせよう(2)

前号では、不登校は心の風邪であること、従って安心して休ませてあげられるように保護者の意識を「チェンジ」させることが肝心であることを述べました。

不登校初日の、最初の家庭訪問を終え、これから不登校児との関わりが始まります。保護者はすぐに不登校が解消されると思ってしまうのですが、時間をかけて子どもや保護者を「チェンジ」させていきます。

### 5 家庭訪問の時間帯

家庭訪問を終え、担任の先生は、明日も欠席だろうと思いつつ帰宅しました。

### Q5 明日の家庭訪問は何時ごろ行えばいいでしょうか？

- ① 登校前
- ② 業間休みや空き時間
- ③ 放課後(夕方)

「③」の「放課後(夕方)」です。

登校前に家庭訪問をして、登校の意欲を喚起させようという気持ちは理解できます。説得し、できれば一緒に登校して欲しいと願っています。熱血教師ほどそうすることでしょう。

逆効果です。頭痛・腹痛・嘔吐など朝になると体が登校を拒否します。これは周りへのサインです。「私は不登校なのです。気づいてください」という心の叫びを行動で訴えているのです。朝は一日の中で最も登校に不適な時間帯です。

担任は登校させようと思つて家庭訪問をします。そんな担任を納得させる、登校を諦めてもらうには症状をさらに悪化させなければなりません。

せん。具合が悪いのですからバジヤマ姿のままです。担任に会うことも拒否するでしょう。これではしっかりと不登校ができません。

業間休みや空き時間も効果的ではありません。担任は万障繰り合わせて家庭訪問の時間を作ります。誠意ある行為だと思つています。しかし不登校児にとっては、「朝の訴え」を終え、やっとゆつくりと不登校ができる「安堵の時間帯」です。そこに登校を促す担任の顔を見ると、また体調悪化をふり返します。

仮に話ができて担任は帰校する時間が気になります。優秀かつ真面目な不登校児ほど担任のそんな思いを斟酌しんくわくします。さらに心の負担を増すだけです。

また、保護者は、不登校は「普通ではない」と思つているだけに近所の人の目が気になります。日中の家庭訪問は、近所の人に欠席していることを知られてしまいます。

では、どうして放課後ならいいのでしょうか。それは、普通の小学生と同じになるからです。クラスの友達が下校し、在宅している時間帯だからです。担任が家庭訪問しても不自然ではありません。お見舞いの家庭訪問、用事があった訪ねたといつても違和感がない時間帯です。

体の不調も時間とともに回復し、放課後は快調になっていきます。「明日は登校する」と笑顔で答え、期待を抱かせるようなことを言うでしょう。担任は明日の登校を期待して帰宅しますが、翌日も欠席です。

### 6 子どもの心の変化

学校を休むことで心のエネルギーが蓄えられ、少しずつ学校復帰の兆しを見せます。

### Q6

心の変化は外に表れます。それはどこでしょうか？

- ① 言葉遣い
- ② 子ども部屋
- ③ 服装

「③」の「服装」です。ある日、靴下を履いています。

不登校児は自宅にいます。不登校が長引くと一日中バジヤマで過ごす子どもがいます。寝る時は素足ですから、靴下は不要です。冬の寒い日でも素足で過ごします。自宅は暖房が効いているので寒さ対策をする必要がないのです。

バジヤマに靴下は似合いません。靴下を履くということは洋服に着替えるということ。人に会う用意があるから洋服を着ます。さらに、出かける意思が靴下を履かせます。靴下は心が外を向いている証となります。

名札も付けるようになります。休日や夏休みに名札を付けるでしょうか。否です。学校に行く必要がないのですから、名札を付ける必要はありません。登校するから名札を付けるのです。

不登校児は登校しませんから、名札を付ける必要はありません。名札を付けるということは登校の兆しを無意識に示しているのです。服装ではありませんが、髪の毛・爪にも目を向けるといいでしょう。

不登校が長引くと髪の毛は伸び放題、ボサボサです。登校する必要がないから外見は気にならないのです。無頓着になります。爪も伸びています。

以前私が入院した時は、剃刀を当てる気になりませんでした。高熱が続くので、髭を剃る元気はありません。ベッド生活ですから、人目は気になりません。

ところが、退院日が決まると自宅から電気剃刀を持ってきてもらいました。退院の前日は院内の風呂に入り、さっぱりしたものです。元気になる人と人目を気にするようになります。

### 7 家庭訪問での会話

担任の家庭訪問を親子で受け入れてくれるようになりました。迂闊なことを話すと不登校が長引くと担任は慎重に話題を選びます。

### Q7

どんな話をすれば「チェンジ」のきっかけになるでしょうか？

- ① 原因究明
- ② 変化の自覚
- ③ 励まし
- ④ 学校の様子

②の「変化の自覚」です。6章の例ですと、「名札」で「チェンジ」です。

「あれ？名札を付けたんだ」「えっ！」

登校する時に名札を付けるのは当たり前です。当たり前のことができなくなっていました。それが、今日はいつものようにできているのです。子どもは無意識に名札を付けたようです。

ここで焦って理由を聞いてはいけません。理由は子どもの口から自然に言わせるのです。それが自覚につながります。

「自分で付けたの？」

「そうだよ。赤ちゃんじゃないんだから名札くらい自分で付けられるよ」

ちよつと頬を膨らませます。怒っているというよりは、親しさを感じます。「これは失礼。赤ちゃんじゃないよね」と互いに笑ってしまいます。「いつ付けたの？」

「起きてすぐだよ。パジャマから洋服に着替えたらずぐに付けたよ。学校に行く時は名札を付けるでしょう」

昨日までは子どもの胸に名札はありませんでした。本人はそれを全く自覚していません。

「名札はね、玄関に置いてあるんだよ。靴を履く前に付けるの。玄関に名札がないということは付けたっていう証拠になるでしょう。自分も安心、お母さんも確認ができるの」

「じゃあ、いつ外に出て大丈夫だね」「うん」

話が終わり、辞去します。玄関まで送ってくれた母親に、名札のことを話します。母親も名札を付けていたことに気づいていませんでした。「不登校になると今までできていたことができなくなりました。欠席している間は洋服に名札を付けていませんでしたよ。それが今日は名札を付けていました。できなくなったことが再びできるようになるといいことは『回復している』『エネルギーが溜まりつつある』という良い傾向の表れです。お母さん、頑張りましたね」

子どもには変化を自覚させ、親には対応の良さと回復度を知らせます。

こういう積み重ねによって保護者は担任を信頼し、胸襟を開いてくれるようになります。我が子への接し方のアドバイスを求め、実践するたびに成否を知らせてくれるようになります。

子どもの「チェンジ」が親の「チェンジ」につながります。



また、子どもが本音を漏らすようになります。「学校を休んで悪い子だよ。お母さんに迷惑をかけているよね」

学校を休んでいるという自己嫌悪。親に心配をかけているという罪悪感。いずれにしても不登校に対して負のイメージを持ち、苦しんでいます。苦しいから不登校になったのに、さらに自分自身で追い討ちをかけているのです。

否定して欲しいと願いながらも、「そうだね」という返事を受け入れる覚悟をしています。

「そうかな。君は正直な子だと思うよ」「正直？」

意外な二言を返します。

「学校に行けなくなるくらい困ったことや辛かったことがあったのでしょうか。それを今まで我慢していたけど、とうとう限界に達したんだよね」

担任はこういう言葉を用意しておく必要があります。そのためには不登校児の心境を察知する力が必要です。